

センター試験「国語」の傾向と対策

安藤延明

第一問 評論

出典は齋藤希史の『漢文脈と近代日本』。中国古典文が士大夫階層のものであり、日本の漢文学習も士族階級のものであったこと、武士は行政能力としての文を積極的に身につけようとし、漢文が統治への意識を育んだことを述べている。

問1は例年通り漢字の問題。「棒」「占」「功」「易」「契」とやさしめであった。

問2は意味段落間の構成意図を読み取る問題。④段落の「ある特定の思考や感覚の型」という思わせぶりな表現は、後に種明かしされることが前提にある。その説明のために「広く考えて」みるのである。

問3は⑥～⑨段落の内容を問う問題。

中国での「展開」を問うているので、⑨

段落が最終段階となる。ちなみに、⑤のように順序を入れ替える選択肢は常套手段。時系列の逆転、原因と結果の逆転などのパターンがあり、足元をすくわれないうように注意する必要がある。

問4は⑫～⑰段落の内容を問う問題。

設問は、傍線部をきっかけとしてどう変化したかを問うている。評論でも小説でも、「あるものが、何をきっかけに、どう変化するか」は極めて重要である。その際には、「～となる」「～になる」という表現に注目するとよい。ここでは「自己確認もヨウイになる」がポイント。

問5は⑱～⑳段落の内容について、全文の内容をふまえて問う問題。③～④段落の「思考や感覚の型」について述べてきた文章であることを念頭におく。

問6の(i)は表現に関する問題、(ii)は構成に関する問題。これも例年通りであるが、毎年苦心されているようである。かといって新課程でも重視されている以上、なくすわけにもいくまい。

全体として見た場合、意味段落の内容を押さえた上で全体のまとめを問い、表現や構成の問題を付す、というスタイルが踏襲されている。漢文学習の意義というテーマからは、「古典に関する近代以降の文章」を盛り込むことを求めた新指導要領の影響を読み取ることも可能だが、そこにこだわるとテーマがある程度固定されてしまうので、来年度以降もこの傾向が続くかどうかはわからない。

第二問 小説

出典は岡本かの子の「快走」の全文。

女学校を出てから家事ばかりしていた道子が、銭湯へ行く時にこっそりランニングを楽しむようになる。時間のかかりようを不審に思った親は、道子宛の手紙をひそかに読んで事実を知る。様子を見に行こうと道子の後を追いかけた親たちも、久々に走る清々しさを覚えた。

問1は例年通り語句の意味を問う問題。「刻々に」「腰を折られて」「われ知らず」

と、やさしめである。文脈によらず選択肢だけで解いても正解できる。

問2は心情把握問題。心情を直接書くのは野暮なので、行動や表情を通して察することができるよう書くのが文学。

「吐息をついて」という行動から読み取れる心情と、「吐息」をついた理由の組み合わせで判断する。

問3も心情把握問題であるが、「内面の動き」とあるように、心情の変化を問うている。問2で確認した心情が、走るというきっかけを通してどう変化したかを読み取る。小説問題の王道である。

問4は傍線を付さず、ある場面までの人間関係を問う問題。32～90行目（「道子はくしまった。」）が判断の根拠となるため、時間を要したのではないか。

問5も心情把握問題で、二か所の「笑い」に現れた心情の違いを読み取る。同じような行動でも、場面により心情は異なる。ここでは傍線部D「娘のことも忘れて」に注目する。「俺達は案外まだ若いんだね」という言葉が微妙に身に染み込んだ。無心に体を動かし汗を流す爽快感は、時代も年代も超える。

問6は例年通り表現に関する問題で、六つの選択肢から二つを選ぶ形式も同じ

であった。①は視点、②は伏線、③は同語の使い分け、④は比喩と色彩感、⑤は人物造形、⑥は焦点人物と人称の変化、⑦でも分類できようか。⑤は何かひねり出したという感のある選択肢。どのような表現がどのような効果につながるかについては、ある程度パターンをつかんでおく必要がある。表現は新課程でも重視されており、来年以降も出題が予想される。

語句、心情把握、表現という問題構成はオーソドックスなものであった。ただし、問4や問6のように広範囲を通じて吟味しなければならぬ設問があり、解答には時間を要したものと思われる。

第三問 古文

出典は『源氏物語』の「夕霧」。実直だった夕霧が落葉宮と関係を持ち、雲居雁が実家へ帰るといふ修羅場である。男女の愛憎には人間の普遍的な姿が現れるとはいえ、結婚に関する現代との習俗の違いは押さえておきたい。

問1は例年通り語句問題。「いかさまなり」「なめげさ」「らうたげなり」「聞こゆ」「いざ給へ」などがポイントで、難しくはない。(ア)④は「いかさま」

をインチキの意味でとらえて「だまして」と訳した選択肢。時折見られるこのような遊び(?)が受験生の心をなごませるか逆なでするかは定かでない。

問2も例年通り文法問題。「なめり」「驚かれ給うて」「のたまひはてば」「言ひ知らせ奉り給ふ」と、これも難しくはない。

問3は「上を恋ひ奉りて愁へ泣き給ふを」を踏まえて解く。その際、注8「上」が決め手となる。リード文と語注は必ず確認させるようにしたい。

問4は心情把握問題で、これも注12「中空」がポイント。落葉宮とも雲居雁とも険悪になり「もの懲りしぬべう」思う、根が真面目な夕霧。当時は恋愛に伴う期待や不安、嫉妬なども含めて楽しむのが「色好み」とされたのだが、「いかなる人、かうやうなること、をかしうおぼゆらん」といふ言葉には、「お前の親父や！」と突っ込みを入れた受験生も多かったろう。なお、④の「死にそうなほど」は「もの懲りしぬべう」を「死ぬ」とした選択肢。例によって例のごとし。

問5は難しい。Bの「見飽き給ひにける」「直る」の尊敬語の有無がポイントで、見飽きたのは相手、直るのは自分。敬語

による主語の判断は必須の力である。

問6は内容一致問題。③は「すぐさま」が不適當で、「奉れ給へど」「暮らしてみづから参り給へり」がその根拠となるが、これも難しい。例年のような表現問題ではなかったが、「あやふし」など文中の語句を引用しているところに、表現問題的にしようとする意図が感じられる。新課程でも表現を重視しており、表現問題が復活する可能性は高いと思われる。

和歌が出題されなかったのも今年度の特徴であるが、和歌は心情把握の面でも表現の面でも出題しやすいので、これも今後の復活が予想される。全体として主語の省略やなじみの薄い古語も多く、読み取りづらかったものと思われる。

第四問 漢文

出典は『陸文定公集』という明代の書である。江南では筍を食べるといふ話から始まって、美味なものは伐られるが不味なものは伐られずむと述べ、莊子の「無用の用」と同じだと結ばれる。

問1は例年通り語の意味を問う問題だが、どちらも送り仮名が省かれている。

(1)は「ならひとす」、(2)は「たつ

とぶ」と訓読する。

問2も例年通り返り点のつけ方と読み方を問う問題。「好事者」は物好きな者。「目」は評価する意で、筍好きな者は若く瑞々しい筍を評価して伸びた筍はとらないということ。「AスルニBヲモツテス」は頻出の句形で、そこに気づけば正解できるが、文意をとるのが難しい。

問3は対となる語の組み合わせを選ぶ問題。「甘」はうまい、「苦」はまずい。「取」は採取する、「棄」は放置する。対句表現はもちろん、対となる語に注意して読む習慣をつけたい。

問4は再読文字「猶」が理解できなければ難しくはない。ただ、問1と同じく送り仮名が省かれている。

問5は書き下し文の問題で、形式に違いはあるものの、問2と同じタイプの問題である。「莫不(ざるはなし)」の句形がわかれば絞り込める。また「取」「棄」に注目すれば、「貴」「賤」は「甘」「苦」の言い換えであることが分かる。語の対応関係を意識して読む習慣をつけたい。

問6は文章の構成を問う問題。表現や構成については新課程でも重要視されているので、今後も出題が予想される。まず具体的エピソードを述べ、最後に一般

化してまとめる、という構成は随筆の典型である。

問7は書き下し文と解釈を問う問題。「豈(耶)だけを見て反語だと早とちりさせようという魂胆であろう。傍線部だけで判断すると間違えるという、最近の傾向にあてはまる。ただし、内容を理解していれば選択肢後半の主張の説明部分だけでも正解できるので、内容一致問題とも言える。

今回は、問2・問5・問7と、合わせて三題も書き下し文に関わる設問があった。また、問1や問4でも傍線部の送り仮名が省かれていた。全体として手掛かりが少なく、話題も受験生の日常的関心とは結びつきにくかったため、読み取りづらかったものと思われる。

今年度の平均点は98・67点で、史上初めて5割を切った。また13年ぶりに満点が出ず、最高点は195点であった。

昨年度の小林秀雄にせよ、今年度の古文漢文にせよ、確かに難しい。しかし、読解の基本が変わるわけではない。受験勉強を狭くとらえず、それまでの読書や思索の経験を豊かにすることが大切であろう。(あんどうのぶあき・高槻中学校・高等学校)